

## 第5章 日本語ガイドブックに見る華北・華中・華南

吉澤 誠一郎

### はじめに

幕末から日本の敗戦に至るまでの時代、中国に渡航した日本人の目的は多様であった。出張や商売のために中国を訪れた者もいたし、兵士として中国の地を踏んだ者もいた。その中国体験も様々であったはずなので、彼らの中国に対する感想や理解も一概に論じることとはできない。そのことを前提としながらも、本章では、日本語で中国について紹介・案内することをめざしたガイドブックを通じて、日本人の中国体験や中国理解、そしてその地域的な差異の認識を考察することにしたい。

そこでまずは、このガイドブックという史料の性格について考えてみる必要がある。この類型の史料のうち日本語のものは、近年、「都市案内」として陸続と復刻されている<sup>(1)</sup>。個別の農村について案内する書籍は稀であろうから、ガイドブックは都市についての案内となることが多い。個々の都市だけでなく、例えば天津と北京をまとめるといったように、複数の都市を併せて紹介する書物もあったし、主要な交通路に沿って中国の多くの都市を案内する書物も刊行されたことがある。また、本章ではあまり触れないが、欧文や中国語のガイドブックも重要な役割を果たしていたと考えられる。

近年は旅行に関わる歴史研究が盛んとなり、中国における旅行業界の発展過程や旅行の文化史的意味についても関心が高まっている<sup>(2)</sup>。また日本人の大陸旅行についての研究も進められている<sup>(3)</sup>。しかし、上に述べたようなガイドブックの史料性格については、正面から議論した研究蓄積に乏しい。それは、端的に言えば、これらガイドブックの史料価値があまり無いと考えられてき

たためであると思われる。近代中国の都市については、他に拠るべき史料が多く残されているから、これらガイドブックを用いて各都市の実態について考察する必要はあまりないと言える。そもそも、ガイドブックの記述は皮相なことが多く、都市史研究の主力史料として用いるのは難しいとすら言えるだろう。

そのような動向に一石を投じる試みとして巫仁恕の編纂した論集は、「城市指南」についての専論を収録している。とくに、北京についての邱仲麟、上海についての林美莉および孫慧敏の論考は、中国人のために中国語で書かれた指南書について、その成立や読者層について考察し、社会史や文化史の観点からの利用可能性について論じており、示唆に富む。また同書には青島について各国語で著された指南書について比較を進めた馬樹華・趙成国の論文も含まれている<sup>(4)</sup>。このような成果を踏まえながら、本章では、日本人のために編纂された中国の都市ガイドブックの歴史的意味について考えてみたい。

ここで改めて書籍の一ジャンルとしての日本語の中国ガイドブックについて定義を示すとすれば、中国への旅行（出張・観光など）および中国での生活の参考のために、有益・必要と思われる情報をまとめて編集した書物といえるだろう。そして、そこでは個別具体的な情報が大切なので、往々にして北京・天津・上海などの特定の主要都市を対象とすることが多い。むしろ各々の書物の個性はあるが、一つのジャンルとして一括して論じることが可能と考えられる。

なお、旅行記も場合によってはガイドブックに似た内容を含み、似た目的に利用される可能性があるが、書物のジャンルとしては比較的容易に区別できる。旅行記の特徴は、特定の人物の行程を逐う形式をもち、多様な情報もその人物の視点から整理・評価されている点にある。これに対して、ガイドブックは、或る特定の人物の旅程に即した叙述方式を用いないのである<sup>(5)</sup>。

それでは、ガイドブックはいかなる意味で史料としての意義をもつのだろうか。それを考えるために、米国のジャーナリスト、そしてジャーナリズム研究者であったウォルター・リップマン（Walter Lippmann）の提示した「ステレオタイプ（stereotype）」の概念をここで取り上げたい。リップマンは、旅行の事例を取り上げて「旅から帰った人の土産話は、旅へ出るときに当人が外国まで

もっていったものについての面白い話になることが多い。それもこのステレオタイプのせいである」<sup>(6)</sup>と指摘している。そしてガイドブックに頼る旅行者を戯画的に描き出す。

……あるいは彼がもっとまじめな心がけの人であれば、旅行中に名所旧跡を訪ねるかもしれない。彼は礎石にちょっと触れ、記念碑にちらと一べつを投げかけるだけで、やおら「ベデカー旅行案内書」に顔を埋める。そして一語洩らさず説明を読み終えてから、次の名所へ足を運ぶということになるだろう。結局のところまじめな彼も、星印一つとか二つとかで等級づけをされて要領よくまとまったヨーロッパの印象を胸に帰国することになる<sup>(7)</sup>。

このようにリップマンは、旅行者の体験に対しガイドブックが決定的な影響を与えることを指摘している。そして、このような現象は、日本語で書かれた中国ガイドブックでも同様であったと考えてよいだろう。

リップマンは必ずしも旅行について論じることを意図してステレオタイプという概念を提示したのではなく、むしろ輿論が適切に政治を論じることができるかという民主主義の根本問題に向きあおうとした。とはいえ、本章の分析にとって、リップマンの洞察は非常に有用と思われる。このようなステレオタイプという視点から日本人の「中国体験」「中国イメージ」を知ろうとするならば、旅行ガイドブックはむしろ不可欠の史料ということになるからである。

## 1 都市ガイドブックの登場と変遷

19世紀後半から20世紀にかけて、欧米で手広くガイドブックを出版していたのは、ドイツのベデカー社（Karl Baedeker）であった。1937年に刊行されたアガサ・クリスティーの探偵小説『ナイルに死す』でも、クルーズ船による観光において、登場人物の男性がベデカーの旅行案内書を拾い読みしながらエジプト学について女性に解説するという場面がある<sup>(8)</sup>。ガイドブックを読んで知ったかぶりするというやや皮肉な表現ではあるが、ベデカーと書けば、どんなも

のか英国の読者に通じると作家が考えていたことがわかる。上に引用したリップマンの文章にも登場するように、ベデカー社は英語版のガイドブックでも知名度を有していた<sup>(9)</sup>。

これに対し、海外に関する日本語ガイドブックとしては、仁礼敬之『北清見聞録』(1888年)<sup>(10)</sup>や林武一編『朝鮮案内』(1891年)が比較的早い時期のものと言える。その後、ガイドブックが盛んに刊行された20世前半について一応の時期区分をするとすれば、次のようになるだろう。

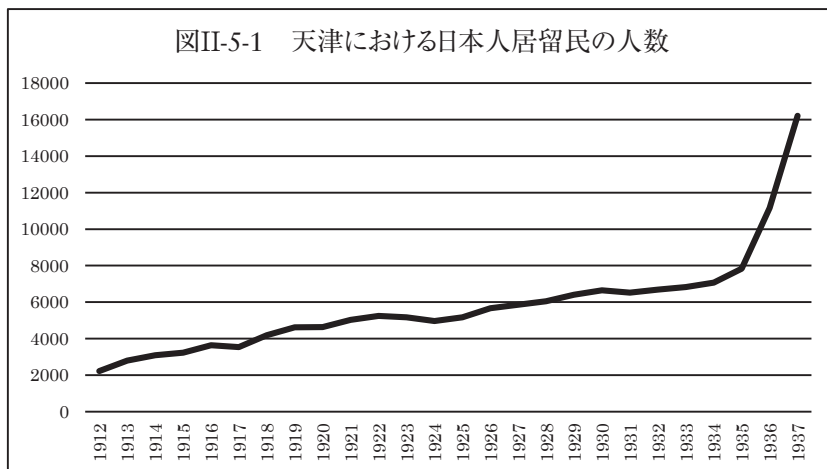
### (1) 清末から民国初年

天津、上海などの主要都市に日本人居留民が増えた時期といえる。とくに1900年の義和団戦争が大きな契機となった。

日本の清国駐屯軍が編纂した『北京誌』(1908年)および『天津誌』(1909年)は、この二つの都市について総合的に紹介しようとするものであった。服部宇之吉はっとりうのきちなどの学者に委嘱して執筆させた部分もあり、充実した内容をほこった。この二冊の内容は決して軍事的な方面を重視したものとは言えないが、やはり日本軍が中心になって編纂したものであるから、厳密にはガイドブックというより調査報告に近いかもしれない。

これに対し、実用的なガイドブックとしての性格を明瞭に有していたのが、遠山景直編『上海』(1907年)である。序論では、「想うに近き将来に於て禹域神州に世界共通の上海国なるものの創建せらるるを見ん」<sup>(11)</sup>と述べ、上海が国際都市としての特殊性をもつことを指摘している。内容としては、上海の地理、租界の機関、交通、娯楽、名所、日本人の組織などを紹介しており、上海を訪れる日本人にとってすぐ役立つ情報を提供することをめざした。

つづいて登場したのが、島津長治郎編『上海案内』(1913年)である。領事館、郵便局、銀行や日本人の組織、機関について説明するほか、名所と交通手段、上海居留民案内、そして蘇州、杭州、寧波の簡単な案内を含んでいる。これは、短期の旅行者だけでなく、上海に居留する者にとっても役立つことを意図していたと言ってよい。1927年の第11版まで改訂を重ねることになった<sup>(12)</sup>。



出典：天津居留民団編『天津居留民団二十周年記念誌』（1930年），618頁。白井忠三編『天津居留民団三十周年記念誌』（1941年），484頁。元の統計では、「内地人」「朝鮮人」「台湾人」の区分があるが，ここではそれらを合算している。また，元の統計によれば1927年は補間法で算出した人数である。

これは，ガイドブックに対する根強い需要を示唆する。上海総領事館の管轄地域における日本人居留民は19世紀末には1000人に達し，1914年には1万人を超え，日中戦争前には2万人に達していた<sup>(13)</sup>。旅客についての統計は得られないが，おおむね居留民の動向と似たような増加傾向にあったと推測しても大過ないであろう。

天津については，富成一二編『天津案内』（1913年）が，旅行者にとって必要な情報のほか，天津における日本居留民の各種の規定に多くのページをあてている。このように，居留民団の規則や日本人の社会組織の規約（日本人クラブ，武術会，商業会議所など）を収録しているのは，長期に天津に居留する日本人も読者として念頭に置いていたからにほかならないだろう。その予想にたがわず，図II-5-1に示したように，天津在住の日本人はほぼ着実に増えていった<sup>(14)</sup>。

## (2) 第一次世界大戦から日中戦争開始まで

日中関係が緊密化し、日本人の出張・旅行の機会が増えた時期と言えるだろう。

まず、日本語のガイドブックではないが、日本の鉄道院が英文案内書 *An Official Guide to Eastern Asia* (1913-1917) を刊行したことが注目される。これは5巻本で、次のような構成となっていた。

- v. 1. Manchuria & Chōsen
- v. 2. South-Western Japan
- v. 3. North-Eastern Japan
- v. 4. China
- v. 5. East Indies: including Philippine Islands, French Indo-China, Siam, Malay Peninsula, and Dutch East Indies



図II-5-2 鉄道院編『朝鮮満洲支那案内』(1919年)の表紙。手軽に持ち運びやすい大きさの案内書として刊行された。

このように、地理的な広がりとしては、日本、朝鮮から中国そして東南アジアを扱っていることから、想定された主な読者は欧米人と考えるべきであろう。なお、この鉄道院の英文案内書の版型や装丁の色使いをみると、ベデカー社の刊行物によく似ている。鉄道院がベデカー案内書を模倣したのであろう。1918年に中国を旅行した作家谷崎潤一郎は、蘇州では案内人を雇っても通訳させるにとどめ、「飽くまでも鉄道院のガイドブックと地図とに拠って自分の勝手に歩き廻る事にした」<sup>(15)</sup>という。彼は鉄道院の英文ガイドブックを利用したのである。

それでも、1917年、内務省参事官の

うしおしげのすけ

潮 恵之輔が提案したように、中国を訪れて中国の官紳と交流する日本人が増えるに従い、日本人に適したガイドブックが求められていた<sup>(16)</sup>。

そのような要望も踏まえてであろうが、その英文版を基礎にしながら、一冊本の日本語のガイドブックも刊行された。鉄道院『朝鮮満洲支那案内』（1919年）である（図II-5-2）。内容は、英文版の第1巻と第4巻に近い。その特徴は、英文版と同様に、交通路に即して各地について説明しているという構成にある。例えば、華中から華南にかけては、路途（ルート）29 揚子江沿岸、30 漢口、31 武昌株州間、32 南京、33 南京上海間、34 上海、35 上海杭州寧波間、36 福州、37 廈門、38 汕頭、39 香港といった具合である。

このような鉄道院のガイドブックは、広範な地域を網羅的に扱うものであるため、特定の都市についての紹介は通り一遍のものとなる。そこで、日本人が関心をもつ都市に即して詳しく解説するガイドブックも登場した。上野太忠編著『天津北京案内』（1920年初版、1922年再版）は、その序文で「……近年日本から特種の目的を持ち、又は単に観光の為に支那に旅行する人が日一日と多くなった。我々の接した所でも学者、政治家、実業家乃至学生、芸人、無銭旅行者等あらゆる所有階級と職業とを網羅して居る」<sup>(17)</sup>と指摘し、旅行者の急増に応えるために編纂した意図を示している。

とくに歴史的な文物を多くもつ北京は、詳しく紹介するに値する対象となった。例えば、丸山昏迷『北京』（1921年）は、なるべく広い視点から北京について全面的な記述をめざしている。また、特定のテーマについての解説文を収録している点も個性的と言えるだろう。それは例えば、清水安三「北京に於ける耶穌教」、栗原誠「文華殿読画記」、木村莊八「大同石仏寺」、村田烏江「支那劇」、永野武馬「支那貨幣」といったものであり、中国の文化についてわかりやすい導入を図る性格の文章である。

丸山昏迷は北京に住んでいて、『北京週報』という日本語紙の記者であった。社会主義の傾向をもつ人物で、文学・芸術に関心が強かった。このような丸山の個性が、『北京』というガイドブックの特徴を生み出したと考えられる<sup>(18)</sup>。また、北京を訪れる日本人のなかには、中国の歴史や文化に強い関心を持つ者

もいただろう。例えば、清朝が収蔵していた書画を鑑賞することを一つの目的として北京を訪れた者にとって、丸山『北京』に収録された栗原誠「文華殿読画記」は便利な手引きとなったはずである。そのような個別の関心に応えることのできるガイドブックとして、丸山の『北京』は登場したのである。

また、村上知行『北平——名勝と風俗』（1934年）になると、さらに著者の個人的な観点が強く打ち出されるに至った（1928年に国民政府は北京を北平と改称した）。

本書は第一に北平案内記である。第二に北平に関しての随筆である。……実を言えば、私は北平遊歴の対象となる巨大な古き建築などには、趣味を持っていない。私が日常最も心して眺めているものは、北平の民衆である<sup>(19)</sup>。このような立場から、村上の『北平』は彼自身の体験や視点に基づいて生き生きと都市の生態を紹介している。その筆致からは都市の民衆に対する村上の共感を見て取ることができる。

また、香港についても、香港日報社『香港案内』（初版1924年、増頁再版1928年）が現れた。

香港!! 何といううるわしい文学的な名称であろう。如何にも懐かしい響きを持った地名ではないか、ホンコン、この美しい名称の起りこそ総ての叙述に先だって先ず知ってみたい事の一つだ<sup>(20)</sup>。

このように香港の魅力を説くことから始まって、香港の風土、行政機関、名所、交通機関、在留する日本人などについて解説する案内書である。これは香港を訪れる日本人向けに作られたガイドブックと言えるが、北京についての丸山や村上の案内書のもつ内容の深みを期待することはできない。

香港だけでなく天津や上海のガイドブックは、北京の案内書ほど歴史と文化の紹介に紙幅を割かない。それは、何より日本人の旅客にとって、北京こそが伝統文化の集まる土地であり、そのような文化体験を期待して北京を訪れる者も多かったという実情を反映していると考えられるだろう。むろん香港・天津・上海に歴史や文化が無いわけではないが、中国文化の精髓を求める者が北京を訪れたいと考えたのも自然の勢いと思われる。

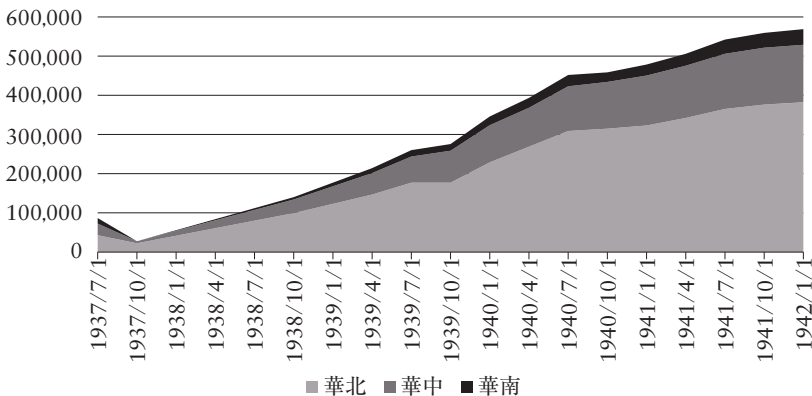
### （3）七七事件（1937年）以後

日本軍の侵攻と占領にともない、中国各地に住む日本人が急増した。図II-5-3が示すように、おおむね過半は華北の居留民であったが、華中と華南も数を増やしたことがわかる<sup>(21)</sup>。

この時期には、とくに華北地方に関する案内書が多く刊行されたが、それは安藤更生編『北京案内記』（1941年）が序文で指摘するような、戦時の特殊な状況の反映であろう。

北京は悠久千年の古都であると共に、今次事変以後は急激に近代都市としての変貌を呈して来た。北京はもはや単なる観光都市ではない。決然として立ち上がった興亜の最主要基地である。在留日本人の数は既に十万と報ぜられる。触手ある都会はついに古く堅固な城壁を打開して、西郊新市街の計画を実行せしめるまでに発展した。かかる永住者乃至半永住者以外に

図II-5-3 華北・華中・華南に在留する日本人の人数



出典：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02130150500第3画像、中華民国在留本邦人及第三国人口概計表／昭和16年7月1日現在（外務省外交史料館，東亜-36）。JACAR: B02130153400第2-3画像、中華民国在留本邦人口統計表／昭和17年1月1日現在（外務省外交史料館，東亜-41）。なお1937年10月1日の華南については、統計を欠くため0とみなした。

も官用、調査、留学、商用、視察、慰問等の目的を以て此地に来往する邦人の数は実に夥<sup>おびただ</sup>しいものがある。これらの人人は折角<sup>せっかく</sup>此地を踏んでも、適当な案内書が無いために世界的な遺跡に接しても空しく看過してしまうようなことが一再<sup>とどま</sup>に止らず、宿泊、観光、買物等に就いても不案内<sup>すくな</sup>の爲めの不便は尠<sup>すくな</sup>くない。一方永住者にとっては全然その指導を欠き、従来出版された二三市販の案内書も単なる観光案内に墮して、北京という土地に住みつく「市民としての生活」の案内は全く之を欠く実情である。本書は特に是等の需要に応じ、その欠を補う意味から編纂せられたもので、親しく此地にあるものには懇切なる指導書であり、遠隔の地にあつて北京のことを知らんとする者に対しては、居<sup>い</sup>乍<sup>なが</sup>らにして目<sup>ま</sup>のあたりこの地を見るの思いあらしめる立体的地誌たらんことを企図した<sup>(22)</sup>。

このように、『北京案内記』は「市民としての生活」について案内することを標榜しており、北京で生活ないし長期滞在するための情報を比較的重視している。「観光篇」で北京の名勝を紹介するほか、「案内篇」は数編の文章を掲載し、そのテーマは京劇・骨董・ホテルなど多岐にわたる。そして「生活篇」には、中国の宴会における礼儀、交際のときの礼節、衣服、人力車の乗り方、保健常識などについて、詳細な解説がある。

なお、第二次世界大戦の終結後は、日本語の中国ガイドブックにおける空白の時代に入る。1980年代以降、日本人が中国を個人旅行することが可能となつてようやくガイドブックの復活が見られるようになったことは、周知のとおりである。

## 2 中国文化論と地域比較論

ガイドブックには、各地の宿泊・交通などの情報のほか、観光・歓楽についての紹介が多く含まれることになる。それは、日本人の中国体験を典型的に知る手がかりとなりうる。

他方で、必ずしも実用的な知識を提供するとはいえないような中国の風俗・

文化についての解説も、ガイドブックにしばしば見られる。

### (1) 中国の風俗習慣への関心と「国民性」論

ガイドブックにおいて、中国の風俗習慣に対する紹介は、衣服、食物、家屋、婚礼、喪儀、歳時風俗など多方面に及んでいる<sup>(23)</sup>。それは、単に生活していくのに必要な事柄の解説というのにとどまらず、見慣れない事柄に対する好奇心を満たすという役割を果たしていたと見ることができる。

日中の文化比較に議論を進めていくこともあった。版を重ねた代表的なガイドブックである島津長治郎『上海案内』(1913年)には、日中の料理の比較がある。

支那に足を踏み入れたものは否やでも応でも此支那料理に馴染まねばなるまい。日本料理の天下一品の如く僅かに飾られたる下物に幾金を費すに比せば、一テーブル八人乃至十人が五六弗より十弗内外にて幾十種の珍味を満腹し得るるのは経済上より言っても非常な差異を感じしめる。蓋日本料理は墮落的にして非文明的である。支那料理は時間的にして規則的である<sup>(24)</sup>。

これは、どのように料理を注文するかなどの実践的な知識を伝えようとするものではなく、そもそも日中の料理についての基本的な観念ないし価値観を比較しようとしていると言えるだろう。なぜ、日本料理は「墮落的にして非文明的」という評価になるのか、この筆者の思考の筋道をたどるのはやや困難であるが、中国料理の合理性を指摘しようとしていることはわかる。

それでは、やはり島津『上海案内』にみえる次の比較はどうだろうか。

支那人は食うの人で、日本人は飲むの人である。……日本酒の酔は其の国民性の如く俊烈であるが、老酒の酔は矢張支那的で緩慢である。老酒の眞の醇なるものは日本酒の如く薬材など加味して居ないので、衛生から言っても良い<sup>(25)</sup>。

中国にも酒を愛する人は多かったと思われるので、この比較はやや性急という印象はあるが、上海の料理屋ならば、確かに老酒（紹興酒など、何年も熟成した醸



なぜガイドブックに載せられているのだろうか。それを理解するために、安藤更生編『北京案内記』（1942年）に収録された服部由治「中国人との交際」という文章を見てみたい。ここでは、林語堂の著作『我国土 我国民』のなかのChinese Characterの説明を引用して、（１）穩健、（２）簡素、（３）自然を愛すること、（４）忍耐、（５）無関心、（６）老獪、（７）多産、（８）勤勉、（９）儉約、（１０）家庭生活を愛すること、（１１）平和主義、（１２）足るを知ること、（１３）諧謔、（１４）保守主義、（１５）肉慾に耽ること……という特質を列挙している<sup>(29)</sup>。

服部によれば、中国の風俗習慣は多様であり、時とともに変化するので、日本人にとって把握しきれない。だから中国人と交際するときには中国人の性格を理解することが最も重要であるという。つまり、「中国人の性格」を理解することで、はじめて適切に交際することができるという発想である。「彼の忍耐と無関心と老獪さを理解して、しかも悠容迫らず彼に相對しうる日本人であるならば、そこに日本人に最も欠けているといわれる政治性を期待する余裕すら生まれるに違いない」<sup>(30)</sup>。

ガイドブックにおいて「国民性」談義が展開される実用的意義は、同様の考え方にもとづいていると考えても大過ないだろう。いうまでもなく、中国人であろうと日本人であろうと、各人の個性の相違は大きいから、ほぼすべての「国民性」論は、一種のステレオタイプといえる。その意味からすれば、本当にそのような「国民性」談義が役に立つかどうかは、疑わしいというべきである。

にもかかわらず、あやふやな根拠にもとづく「国民性」論が好まれたのは、やはり一定の実用的意味があったからと考えられる。現実是非常に複雑であり、短時間で十分に把握することは不可能である。そこで、ステレオタイプは、その妥当性は疑わしくても、少なくとも自分の行動を決定する指針とはなりうる。

ガイドブックは、まさにそのような皮相なステレオタイプを提示することに本領があったといえることができるだろう。

## （２）北方と南方との比較論

しかし、実は中国人をまとめたステレオタイプだけではなく、中国の内部に

についても「北方」と「南方」を対比した議論がなされていたことにも、留意する必要がある。富成一二編『天津案内』（1913年）における「北方気質」と「南方気質」の比較論が、その代表的な論調といえる。まず、北方の風土は、それに対応する気質を生み出したとして、次のように論じる。

北方の地たるや、氣候嚴酷乾燥にして地味<sup>はくせき</sup>薄瘠なるを以て、民皆勤苦勞役して其生を営み、漠々たる平野は<sup>たん</sup>坦として海の如く<sup>ただ</sup>直ちに崑崙の余脈に接するを以て、其風物は綜合的壯觀に富めるも、局部的美觀を欠き頗る單調なり。唐詩の所謂「白日依山尽，黃河入海流，欲窮千里目，更上一層樓」の如きは北方平原の真景を読み得て妙なるものと云うべし。……<sup>かくのごとき</sup>如是風土に加うるに代々北方に行われたる激烈なる生存競争は、遂に其民を化して<sup>よくうつ</sup>抑鬱剛健にして実行的なる意思の力を養成し、且つ之に附するに政治的才能を以てし、黃河流域の地は古來支那に於ける政治的主力たるに至れり。されば古來北支那より輩出せる人材、<sup>ひんびん</sup>彬々として<sup>いとま</sup>数うるに違あらず<sup>(31)</sup>。

南方は、これと対蹠的である。

<sup>ひるがえり</sup>翻て南方に見るに氣候<sup>おんじゆ</sup>溫濡地味膏肥にして民力<sup>こうひ</sup>余裕あり。而して北嶺南嶺の兩山脈は長江の本支流を囲んで起伏<sup>めんこう</sup>綿亘し山水の配置は北方の如く單調輕燥ならず。四面の風物清秀溫雅にして依稀<sup>い き たんとう</sup>澹蕩なり。杜牧の詩に「千里鶯啼綠映紅，山郭水村酒旗風，南朝四百八十寺，多少樓台煙雨中」とあるは是れ<sup>じゆんこ</sup>純乎たる南方の風致を示したるものなりとす。斯の如き地理的<sup>かく</sup>自然の影響を受けたる南方の民は意思に乏しく感情に富み、想像力に長ずるは自然の勢なり。文学的思想の發達甚しく彼の老莊の南方文学の如き滔々として此地方の人心に浸潤せり。……而して其の政治的才幹に至りては以上の感化を受けて消磨せられ、常に命を北方に<sup>ま</sup>俟てり<sup>(32)</sup>。

如上の比較論は、歴史的な経緯も加味されているとはいえ、根本のところでは、氣候・風土の影響力を大きくみるところに特徴があり、一種の地理決定論である。

しかし、このような比較論は、『天津案内』の独創ではなかった。『天津案内』は梁啓超の「中国地理大勢論」を引用しながら議論を展開していたからである。

梁啓超のこの論文は、疑似科学としての地理決定論に基づいて論を展開したもののとして知られている<sup>(33)</sup>。この比較論では南方人の文弱ぶりが強調されているのだが、その論法は南方人に属する梁啓超に由来していたことになる。

なお、このような北と南の対比は、明治時代の日本人がもっていた中国イメージの中に含まれていたと見てよいかもしれない。上の引用文では、王<sup>おう</sup>之<sup>し</sup>渙<sup>かん</sup>の「<sup>じやくろう</sup>鵲<sup>と</sup>楼<sup>ぼく</sup>に登る」と杜<sup>こう</sup>牧<sup>なん</sup>の「<sup>しゅん</sup>江南春」が、風土の情景を生き生きと示すために効果的に用いられている。これらは19世紀の日本で広く愛誦された『唐詩選』に収録されていて、有名な詩だったといえるだろう。その意味で、中国の風土が北と南とで大きく異なることは日本人の一種の常識となっていたとも思われるが、それを気質の相違と結び付けた点はやはり梁啓超など近代の発想と考えてよい。

さて、このような南と北の気風の区別を、日本の国策の観点から論じたのが、日中戦争の開始まもなく刊行された小倉章宏『北支の新生活案内』（1937年）である。

北人の性質は割合に着実に浮薄な所がなく、大体に保守的の傾向を有し、事物の了解が遅いが、その代わり意思堅固で、理論よりも実行を重んじ、一旦定めれば最後まで遂行すると云う操志がある。人との交際も初めは人好きが悪いが、相信すれば永く変わらないと云う美点がある。之に反し南人は概して伶俐で感傷的で、頭脳は明敏にして了解は早い、旧きを捨て新しきを追う為め、思想の自由と進歩のある点は遥かに北方人の比ではないけれども、一方に剛健の風に乏しく、著しく軽薄の傾向が見える。従って人情は薄く、利害の打算から交際の濃度を変える事は、南人の欠陥であろう<sup>(34)</sup>。

このような対比は、極めて政治的な結論を導き出すためのものである。すなわち「此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に我国が北支那活動の目標を置いてこそ、初めて我国の北支新生活の意義があり、またそこに無限の発展性を見出し得るのであると思う」<sup>(35)</sup>というのである。

このようにして、「北支」についてのガイドブックは、北方人の資質を称揚しつつ、日本の華北支配を推進することを正当化する内容も含みこむことになっ

た。先に引用した安藤更生『北京案内記』（1941年）が、北京について「決然として立ち上がった興亜の最主要基地である」と位置付けていたように、ガイドブックが政治的な情勢について言及するのは、その時代状況のもとでは意外とは言えないだろう。

ガイドブックが対象地域の魅力を語ろうとするのは当然で、上海や香港についての日本語ガイドブックにもその傾向はみられる。しかし、南方人と北方人を対比したときのステレオタイプを提示した『天津案内』『北支の新生活案内』には、南方人をあえて敬遠する感覚が表明されていたことになるのである。

## おわりに

本章では、中国についての日本語ガイドブックについて概観し、その史料としての意味について考察した。すでに述べたように、華北・華中・華南の主要都市を紹介するガイドブックがそれぞれ刊行されていたが、内容には一定の共通性があることから、一つのジャンルと見てよい。ただし、北京については中国の伝統文化について深く紹介するという必要性があり、また北京・天津は（上海や香港と異なり）1937年夏から全面的に日本の支配下に置かれたという経緯から、華北について各種各様のガイドブックが刊行されたと考えられる。

日本人が編纂した中国都市ガイドブックは、しばしば中国人の「性格」「特質」について論じている。これらの記述について不正確さを我々が指摘するのは容易である。しかし、ガイドブックの真骨頂とは、物事を単純化して短時間で一定の把握を与える機能にあると見るならば、当時の日本人がガイドブックの提示するステレオタイプをある程度受け入れて行動の指針として利用したことは不思議ではない。

ガイドブックの史料的性格は、日本人の「中国体験」を典型的に知ることができる点にある。その記述の内容そのものには、実態把握の面でそれほど史料価値はないかもしれない。しかし、偏見を含めた中国イメージを論じるためには、非常に有益な史料と言ってよい。そして、中国社会に接する中で日本人

が直面せざるを得なかった局面について理解することを可能にしてくれる。なお、ガイドブックという史料の持つ類型性という限界を打破するためには、個人の個別的な記録を併用することが有効と思われる。

本章では、日本語のガイドブックのみについて論じたが、中国語や英語などによるガイドブックも当時存在していた<sup>(36)</sup>。それらは異なる読者を想定していたことから、一応別個の分析を経たうえで、比較研究を進める余地がある。また、日本語のガイドブックとしては、中国の領土でありながら租借地として日本の支配下にあった大連についてのものもあり、本章では扱うことはできなかったが、今後は視野に入れるべきであろう。

#### 注

- (1) 『近代中国都市案内集成』上海編12巻、北京・天津編13巻、大連編18巻（ゆまに書房、2011-2017年）。『香港都市案内集成』13巻（ゆまに書房、2013-2014年）。
- (2) Liping Wang, "Tourism and Spacial Change in Hangzhou, 1911-1927," in Joseph W. Esherick ed., *Remaking the Chinese City: Modernity and National Identity, 1900-1950* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000). Madeleine Yue Dong, "Shanghai's China Travelers," in Madeleine Yue Dong and Joshua Goldstein eds., *Everyday Modernity in China* (Seattle: University of Washington Press, 2006). 沈松橋「江山如此多嬌——1930年代的西北旅行書写与国族想像」(『台大歴史学報』37期, 2006年)。呂曉玲『近代中国避暑度假旅遊研究(1895-1937)』(合肥工業大学出版社, 2013年)。易星星「中国国内における中国旅行社のネットワーク展開」(『現代中国研究』38号, 2016年)。
- (3) 川村湊『満洲鉄道まぼろし旅行』(ネスコ, 1998年)。有山輝雄『海外観光旅行の誕生』(吉川弘文館, 2002年), 18-88頁。瀧下彩子「旅先としての華北」(本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『華北の発見』東洋文庫, 2013年)。Kenneth Ruoff, "Japanese Tourism to Mukden, Nanjing, and Qufu, 1938-1943," *Japan Review*, vol. 27, 2014.
- (4) 巫仁恕主編『城市指南与近代中国城市研究』(開源書局／民国歴史文化学社, 2019年)に収録された邱仲麟「従会館・廟寓到飯店・公寓——北京指南書旅宿資訊の近代化歷程」, 林美莉「略論近代華文上海指南書刊の編纂策略」, 孫慧敏「何為上海, 如何指南——『上海指南』的空間表達(1900-1930)」, 馬樹華・趙成国「城市指南与近代青島的空間變遷」。なお、同書所収の吉澤誠一郎「近代日本の中国城市指南及其印象——

以北京・天津為例」は本章と重なる内容を含んでいる。

- (5) 旅行記を用いて、日本人の中国観を分析した研究として、次がよく知られている。  
Joshua A. Fogel, *The Literature of Travel in the Japanese Rediscovery of China, 1862-1945* (Stanford: Stanford University Press, 1996).
- (6) W. リップマン (掛川トミ子訳) 『世論』上巻 (岩波書店, 1987年), 135頁。
- (7) 同前, 135-136頁。
- (8) アガサ・クリスティー (黒原敏行訳) 『ナイルに死す』 (早川書房, 2020年), 198頁。なおこの男性はドイツ人という設定であるから、ドイツ語版ベデカーなのかもしれない。
- (9) ベデカーについては、中西善弘「ベデカー旅行案内書に窺える地域研究への視角」(天理大学『外国語教育——理論と実践』15巻, 1989年)も参照。
- (10) 本書については、久保亨「華北地域概念の形成と日本」(本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『華北の発見』東洋文庫, 2013年), 同「仁礼敬之の『北清見聞録』と黎明期のアジア主義」(東洋文庫編『アジア学の宝庫, 東洋文庫——東洋学の史料と研究』勉誠出版, 2015年)に詳しい。
- (11) 遠山景直編『上海』(遠山景直, 1907年), 4頁。
- (12) 孫安石「日本人の見た上海イメージ——『上海案内』の世界」(孫安石監修『近代中国都市案内集成』上海編, 第1巻, ゆまに書房, 2011年)。
- (13) 中国における日本人居留民数については、副島國照「戦前期中国在留日本人口統計(稿)」(『和歌山大学教育学部紀要』人文科学33集, 1984年)参照。また上海の日本人居留民については、高綱博文『「国際都市」上海のなかの日本人』(研文出版, 2009年)が詳しい。
- (14) なお同様の統計表が、万魯建『近代天津日本僑民研究』(天津人民出版社, 2010年), 76-77頁に見える。
- (15) 谷崎潤一郎「蘇州紀行」(『谷崎潤一郎全集』第6巻, 中央公論新社, 2015年), 162頁。
- (16) 潮恵之輔「支那有力者との暖かなる関係を望む」(『ツーリスト』5巻1号, 1917年)。
- (17) 上野太忠編『天津北京案内』(日華公論社, 1922年再版), 自序。
- (18) 山下恒夫「蔣偉の先駆者・丸山昏迷」(『思想の科学』第81, 82, 83, 84号, 1986年)。三宝政美「『北京週報』の記者丸山昏迷について——北京女高師学生団訪日旅行を通して」(淑徳大学『国際経営・文化研究』3巻2号, 1999年)。
- (19) 村上知行『北平——名勝と風俗』(東亜公司, 1934年), 序1頁。

- (20) 香港日報社編『香港案内』増頁再版（香港日報社，1928年），1頁。香港日報社については，呉佩軍「『香港日報』日本語版とその芸術欄」（『跨境——日本語文学研究』vol. 8，2019年）に紹介がある。
- (21) なお，元の統計史料では「北支」「中支」「南支」と区分されているが，それぞれ複数の領事館の管轄区域がこれに相当する。日本人には朝鮮人と台湾人を含んでいる。おそらく同じ統計に基づく「内地人」のデータが，沈殿忠主編『日本僑民在中国』（遼寧人民出版社，1993年），下冊，1888-1889頁，および米衛娜『近代華北日僑問題研究』（人民出版社，2012年），49頁に見える。
- (22) 安藤更生編『北京案内記』（新民印書館，1941年），1-2頁。
- (23) 例えば次のような例がある。富成一二編『天津案内』（中東石印局，1913年）「風俗人情」：衣服，食物，家屋，婚娶，喪儀，歳時風俗。丸山昏迷『北京』（丸山幸一郎，1921年再版）「北京の風習」：衣服，飲食，住居，歳時風俗，婚礼と喪儀。村上『北平』（前掲）第8章「北平歳時記」。小倉章宏『北支の新生活案内』（生活書店，1937年），後篇「生活」も婚儀・喪儀の習俗や歳時祭祀について説明している。
- (24) 島津長治郎編『上海案内』（金風吟社，1913年），31頁。
- (25) 同前，32頁。
- (26) 日本人の中華料理体験については，岩間一弘編著『中国料理と近現代日本——食と嗜好の文化交流史』（慶應義塾大学出版会，2019年）参照。
- (27) なお，谷崎潤一郎も1919年に発表した随筆のなかで「私は支那の国民性を知るには支那料理を喰わなければ駄目だと思う」と指摘している。谷崎潤一郎「支那の料理」（『谷崎潤一郎全集』第6巻，中央公論新社，2015年），485頁。
- (28) 小倉『北支の新生活案内』（前掲），139-142頁。
- (29) 安藤編『北京案内記』（前掲），352頁。
- (30) 同前，356頁。
- (31) 富成編『天津案内』（前掲），202-203頁。なお，原文の明らかな誤植は訂正した。
- (32) 同前。なお，杜牧の詩句の引用には誤りがあるが，そのままとした。
- (33) Ishikawa Yoshihiro, "Liang Qichao, the Field of Geography in Meiji Japan, and Geographical Determinism," in Joshua A. Fogel ed., *The Role of Japan in Liang Qichao's Introduction of Modern Western Civilization to China* (Berkeley: Center for Chinese Studies, Institute of East Asian Studies, University of California, 2004). ここで参照されている梁啓超の論文は，中国的新民「中国地理大勢論」（『新民叢報』6号，8号，1902年）が初出であるが，『天津案内』は梁啓超の文集などを利用した可能性がある。

- (34) 小倉『北支の新生活案内』（前掲），36頁。
- (35) 同前，38頁。
- (36) 一例のみ挙げる。*All about Shanghai: A Standard Guidebook*, with an introduction by H. J. Lethbridge (Hong Kong: Oxford University Press, 1986), originally published in 1934. 中国語ガイドブックについては，巫主編，前掲書に詳しい。